

ほんばこ



No. **63**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 63 号 (通巻第 79 号)

2021 年 3 月 16 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ・『寡作の作家との長いつきあい』
西原 宣明 2 ~ 3 p
- ・〈 図 書 紹 介 〉
4 ~ 5 p
- ・最近の受入図書 (2020年9月~2021年3月受入)
6 ~ 7 p
- ・教育図書館のご案内
8 p

「寡作の作家との長いつきあい」

西原 宣明

わたしは歴史小説を読まない。

子どもの頃から小説や児童文学などは読んだが、ノンフィクションの方を好んだ。歴史小説は読まないが歴史には興味があり、大学で学び高校の社会科教員となった。

いつも困るのが、「歴史上の人物で誰が好きか?」「誰を尊敬するか?」といった質問である。わたしは答えられないし、即答できる人をあまり信用できない。多くの人が「好きな」あるいは「尊敬」している歴史上の人物は、歴史小説の登場人物である。作家によって創作されたものであり、その人物の行動や業績が歴史の真実かどうか、はなはだ疑わしいケースも多い。そもそも「歴史小説に出てくる人物で誰が好きか?」「誰を尊敬するか?」という質問にすべきである。であれば、「小説の主人公で誰が好きか?」「誰を尊敬するか?」でもいいではないか。何だかどうでもいい質問になり、質問そのものが無意味となる。よって、わたしは答える必要がなくなる。

かつてメディアでこんなコメントが飛び交ったことがあった。「今の若者は、尊敬する人物は誰かと問われると『父です』とか『母です』と答える。そのような答えを期待して質問しているのではない。目標とする人物はいないのか?」と。何を求めているのか意味がわからない。「今の若者」、素晴らしいではないか。「歴史小説上の人物」や「有名人」を尊敬すると公言する愚かさと比較にならないくらい賢明である。学生のころこんな遊びをした。「大阪城天守閣を建てたのは誰?」「豊臣秀吉」「ブー。正解は大林組」。

「大坂城を建てたのは?」「大工さん」というのもある。「名前」さえ大々的に記録されていない人たちこそが、過去においても今の社会において

も尊敬されるべき人であることは言うまでもない。

この稿を書いているのは2021年2月28日である。この1年いろいろなことがあった。そして、わたしの周りでも、今日一日いろいろなことがあった。20年以上担当してくれていた洋品店の店員は今日で雇止めとなった。わたしは彼の千秋楽の客となることができた。10年以上担当してくれている美容師は、新店舗の経営にチャレンジをしようとしたが、あきらめる決断をした。明日から新店舗で陣頭指揮を執る計画は変更されたが、志を将来につないだ。3月、4月になれば、卒業、入学、就職、転勤など出会いや別れ、いろいろあると思う。こうした一つ一つの事象が、それがたとえ個人的なごく些細なことであっても、新たな歴史を紡いでいくのである。

とここまで書いてきたものの、どこの世界にも例外は存在する。わたしは、この人の書いた歴史小説だけは読む。その人は、酒見賢一である。彼がどういう人なのか知らないし興味もない。どれほどの知名度があるかもわからないし興味もない。たまたま読んだ小説が彼の書いたもので、わたしが興味深く読んだだけのこと。これがファンというものなのかはわからない。なぜ彼の書いた小説を是とするのか。その理由として、①わたしが冒頭こねくり回した屁理屈が、ストーリーの所々に散りばめられていること、②登場人物が無茶苦茶なことをするが、冷静かつ客観的なストーリー展開となっていること、③史実とそうでないことをしっかりと書き分けていること、すなわち歴史に誠実であること、などがあげられる。

ただ、彼の作品はあまりにも長編過ぎて完結まで何年かかるかわからない。しかも不定期刊行であり、わたしは1992年以来2つの作品しか読んでいない。この作家に関する情報量は驚くほど少ないので、他に出版されている作品があるのかもしれないが、わたしは知らない。わたしは彼のデビュー以来、「待ち」続ける読書生活を送っている。

2014年正月、神奈川県高等学校教職員組合の機関紙「高校神奈川」に「五十而知天命」と題してこの作家のことを書いた。

わたしは今年50歳。まだ「自分の与えられた使命」がわからない。40歳代も終わろうとしているのに、いまだに戸惑ってばかりである。

ある作家がデビューしてからもう20年以上、すべての作品を読み続けてきた。ただこの作家の本は出版されるペースが非常に遅い。すでに第一部から第三部まで出版されている長編小説の続編



は、昨年とうとう刊行されなかった。第三部は一昨年、第二部は7年前である。第一部がいつ出たかなど遠い昔のこと。早く第四部が読みたい。わたしはもがき苦しみながら待っているのである。この作家の出版ペースにあわせて読書生活を送り続けることこそが、わたしの天命なのか。さて、この長編小説、わたしが定年退職するまでに完結するのだろうか。果たしてそれはいつのことか。

この中に出てくる長編小説の第四部は2014年11月、第五部は2017年6月に刊行され完結した。わたしの定年前には完結したが、実に第一部が2004年11月に刊行されて以来12年半かかっている。その長編小説とは、『泣き虫弱虫 諸葛孔明』（文藝春秋刊）である。この小説、第一部にはタイトルに「第一部」とはない。てっきり一卷完結だと思っていた。内容的にそれもありかと思っただ、この顛末である。本当に困ったものだ。

実は2004年正月にも、わたしは「高校神奈川」に「四十而不惑」と題して、この作家のことを書いている。この時は、孔子の弟子である顔回を主人公にした『陋巷に在り』（新潮社刊）について、

完結したことを喜びつつ書いた。こちらは、1992年11月に第1巻、完結となる第13巻は2002年5月発刊なので、10年弱かかっている。ただし、わたしが読み終えたのは、2003年11月。なぜかという、発売されたことを知らずにいたからである。改めて書くが、この作家の情報量は驚くほど少ない。

さて、この2つの作品の内容については、お読みいただければいいのだが、一点だけ指摘しておきたい。人の生死についての描き方が印象的である。『泣き虫……』ではバタバタ人が死んでいく。死の場面にドラマはなく、呆気なく死んでいく。淡々とその様子が描かれる。死ぬ直前まで自分自身が死ぬとは思っていない登場人物がほとんどである。現実はそのようなものだと思う。一方『陋巷に……』では人が死なない。死にそうになるが死なない。人の生に対する執着が描かれる。本当にしつこい。そして生き延びる。これも現実である。2つの作品の主人公は、諸葛孔明であり、顔回であるのだが、作品の主題は作り物ではない現実の、真実の「人の生死」ではないかとわたしは思う。

では、この作家の最新作はどうなっているのか。わたしは知らない。何度も書くが情報量が驚くほど少ない。ただ「待つ」しかない。『泣き虫……』が完結して4年になるが、待ち続けている。20代から50代の今現在まで、わたしの読書生活は、この作家に振り回されてきた。この作家の作品とともにこれからも歳を重ねていくのか。

恐るべし酒見賢一。

（日本教職員組合 書記次長）

《 図 書 紹 介 》



『デジタル・シティズンシップ』

コンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学び

坂本 旬・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・

林 一真著 大月書店 2020.12

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、オンライン教育の必要性が一気に高まったことから、GIGAスクール構想が前倒しされた。今年中には、小中学生に一人一台のタブレット、パソコンが整備されることになった。

ICTを教育活動の道具として使用する際、各学校で最も頭を悩ますことの一つにオンライン上の情報に対するリテラシー、モラルを育てるとりくみがある。この情報モラル教育は、30年以上の歴史をもつという。ICTを正しく安全に利用できること、健康との関りを理解するなどをポイントに、ICTを使う際には「〇〇をしないこと」という側面が強く打ち出されてきた。本書の中では、「生活指導的な」情報モラル教育が盛んになり、児童生徒の家庭生活まで管理・監督・監視する傾向になっていると指摘している。従来の学校の情報モラル教育では、ICTを、使わないことを当然とし、使うにあたってのリスクを強調されてきた。そのため、どうしても授業に必要な限りICT機器にカギをかけたまま使わせないようにしてきた。その結果として、ICT機器は眠ったままという状態になってしまうという。これまでLL教室、電子黒板など、さまざまなI

CT機器が導入されてきているが、数年経つと活用されないばかりか、ほこりをかぶっているという現状もある。この書籍では、なぜ、そのようになってしまうのかという原因、整備されたタブレット端末を活用して、子どもたちのより良い学びを保障するヒントも書かれている。

子どもたちが社会人として生きる未来は、ICTは個人の知的活動を支える道具であり、空間を越えて多様な人たちと対話し、新たな価値をうみだすのが当たり前になっている。そのような社会を生きる子どもたちには、ICTを活用して多様な見方や意見を認め合い、受け入れ合うことで、新しい社会を創造する主体者としての経験や学びを保障していく必要がある。

シティズンシップとは主権者教育と呼ばれている。デジタルシティズンシップとは、ICTを活用し人権と民主的な社会の実現のために主権者として行動するあり方と言える。そのためには、子どもたちは情報や情報技術についての安全で合法的で責任をもった利用法を理解、実践する力を育む必要がある。また、授業者は、学習者中心の教育方法によってすべての学習者の多様なニーズに対応することが求められる。つまり、ICT活用にあたって教師中心の授業から、学習者である子どもたちの対話を通じて主体的な学び合いの場をつくることが求められているという。

この書籍は、GIGAスクール時代になり、学習者中心の授業への転換、そしてICT機器を活用した主権者教育の推進を具体的な実践例で提示しており、手元においておきたい一冊である。

(教育図書館 藤川)

こんな本もあります (新着図書)

『日本のオンライン教育最前線』石戸奈々子 編著 明石書店 2020.10

『スマホ脳』アンデシュ・ハンセン著 久山葉子 訳 新潮社 2020.11

今年に入ってからの緊急事態宣言以後、今年の4月ほどでないにせよ、長い期間にわたる行動制限は、やはり閉塞感を感じます。オンライン授業、インターネットによる学びのスタイルの導入は、教育における産業革命や明治維新のような大きな時代の変化だと思います。自分だけはスタイルを変えたくないと思っても容赦なく社会は変化していきます。学校現場の先生方が、今年の緊急事態宣言以来、大変な状況で奮闘されていることと思います。これからの時代を乗り切って、より良い生活をしていく一助になれば……。



『子供がぐんぐん伸びる
「オンライン学習」活用術』
前田大介・松永暢史著 ワ
ニブックス 2021.1

必要な部分を効率よく吸収できるように、「主体的に楽しく学べる！ 時間もお金もかからない！」活用方法が書かれています。オンラインで学校から与えられたものをただ真面目にその時間を使うわけではなく、本人まかせの部分があるわけです。そういった意味からは、では学校教育はこれから何をしていけばよいのか？ という問いも出てくるかもしれません。学校という集団の中で学ぶ意味、そんなことは書かれていません。だからこそ、書かれていない部分を想像してみるの面白いかもしれません。

「この本は以下のような方のために書きました。
*塾代を抑えて受験勉強をさせたい方
*これからの時代にあった教育をお探しの方
*お子さんの学力を自然と伸ばす学習法をお探しの方
*受験合格後も子供が燃え尽きないようにと願う方」



『スマホで子どもが騙される』
元捜査一課刑事が明かす手口：
親の知らないSNS・ネット
の危険な世界 佐々木成三著
青春出版社 2021.2

副題のごとく元捜査一課刑事が実際にあった事件をもとに分かりやすく書かれています。

- ① SNSやゲームがらみの誘拐・監禁
- ② 闇バイト
- ③ 不適切写真・動画によるトラブル
- ④ 自撮り性被害
- ⑤ SNSへの誹謗中傷

これらの事件にあわないためのスマホを安全に使うためのクイズ形式の問題、さらには「子どもを守るのは子ども自身が情報を客観的に観察・判断し、コミュニケーションを通じて問題解決する力。」直観力を鍛えることが困難を乗り越え、生き抜く力を身に着けることができると教えてくれます。

おそらく、今までの学校教育についての考え方を大きく変えてしまう部分もあり、試行錯誤している現状もあると思います。オンラインに慣れて、ネットサーフィンから情報検索ができるようになれば、学校でつくる教材よりもさらに良いものが出来るでしょう。自分でどんどん探すことができる子は、学びが広がり進んでいけます。しかしながらメリットだけでなく、ネットで犯罪にまきこまれる危険もあります。社会にでてから、子ども達は、さまざまな問題を自分で解決して生きていかなければなりません。教育は生きていく自信と方法、考えることを学び、先生や友達という助け合える存在を得ることのできる場であってほしいと思っています。

(教育図書館 川内)

最近の受入図書

(2020年9月～2021年3月受入)

【日教組刊行物】

- 『実習教員全国集会要項・報告書』2016～2019年度 日本教職員組合実習教員部編
- 『日教組 両性の自立と平等をめざす教育研究会』2016～2018年度 日本教職員組合編
- 『学校図書館全国集会要項・報告書』2015～19年度 日本教職員組合編
- 『いんふおめーしょん子どもの人権連』No.152～163 子どもの人権連事務局編
- 『Q & A 教職員の勤務時間』日本教職員組合編 (株)アドバンテージサーバー 2017.1
- 『超勤・多忙化解消につながる労安活動のポイント』労働安全衛生活動の先進事例編集委員会編 著 (株)アドバンテージサーバー 2015.8

【教育総研・県教組刊行物】

- 『季刊フォーラム教育と文化』99号 2020 Spring 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2020.9
- 『季刊フォーラム教育と文化』100号 2020 Summer 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2020.10

【文部科学省刊行物】

- 『文部科学法令要覧』令和3年版 文部科学法令研究会監修 ぎょうせい 2021.1
- 『諸外国の教育動向 2019年度版』第157集 文部科学省 明石書店 2020.10

【平和資料】

- 『戦争孤児たちの戦後史』1～3 浅井春夫著 吉川弘文館 2020.8
- 『戦没学生の遺書にみる15年戦争』わだつみ会編 光文社 1963

【和雑誌】

- 『歴史地理教育』No.889～No.895 (2019.1～2019.6) 歴史教育者協議会編
- 『内外教育』No.6746～6772 (2019.5～2019.8) 時事通信社編 時事通信社
- 『戦後教育史研究』No.31～33 (2018～2020) 明星大学戦後教育史研究センター編
- 『教科書レポート』No.57～62 (2014～2019) 「教科書レポート」編集委員会編 日本出版労働組合連合会

【社会・歴史・教育】

- 『関東大震災鉄道被害写真集：惨状と復旧一九二二～一九二四』東京鉄道局写真部編 吉川弘文館 2020.9
- 『武漢支援日記』查瓊芳著 岩波書店 2020.10
- 『スマホを捨てたい子どもたち』山極寿一著 ポプラ社 2020.6
- 『わたし、虐待サバイバー』羽馬千恵著 ブックマン社 2019.8
- 『官製ワーキングプアの女性たち』竹信三恵子・戒能民江・瀬山紀子編 岩波書店 2020.9
- 『ヴィオラ母さん』ヤマザキマリ著 文藝春秋 2019.1
- 『鏡の中のアメリカ』先崎彰容著 亜紀書房 2020.11
- 『鬼滅の日本史』小和田哲男監修 宝島社 2020.10
- 『よくわかる依存症：ゲーム、ネット、ギャンブル、薬物、アルコール』榎本稔著 主婦の友社 2020.6
- 『99%のためのフェミニズム宣言』シンジア アルツァ ティティ・バタチャーリャ ナンシー フレイザー 共著 人文書院 2020.10
- 『教育現場は困ってる』榎本博明著 平凡社 2020.6
- 『異なる声に耳を澄ませる』東京大学教養学部編 白水社 2020.5

『全国学力テストはなぜ失敗したのか』川口俊明
著 岩波書店 2020.9

『貧困・障がい・国籍教育のインクルーシブ化に
学校はどう備えるか』共生社会の学校づくり研
究会編 学事出版 2020.10

『手のひらの五円玉』リヒテルズ直子著 ほんの
木 2020.10

『ストレス時代の子どもの学び』副島賢和著 風
鳴舎 2020.11

『教育委員会が本気出したらスゴかった。』佐藤
明彦著 時事通信社 2020.10

『図表でみる教育2020年度版』経済協力開発機構
(OECD) 編著 明石書店 2020.12

『日本語の奥深さを日々痛感しています』朝日新
聞校閲センター著 さくら舎 2020.10

『空気が読めなくてもそれでいい。』細川貂々、
水島広子著 創元社 2020.12

『「勤労青年」の教養文化史』福間良明著 岩波
書店 2020.4

『はなれていても、だいじょうぶ』副島賢和著
学研教育みらい 2020.9

『A I時代の教師・授業・生きる力』渡部信一編
著 ミネルヴァ書房 2020.7

『植民地教育とはなにか』佐野通夫著 三一書房
2020.3

『もう一度考えたい「ゆとり教育」の意義』辻村
哲夫 中西茂著 悠光堂 2020.9

『基礎からわかる情報リテラシー』奥村晴彦、森
本尚之著 技術評論社 2020.11

『教員という仕事』朝比奈なを 朝日新聞出版
2020.11

『チョンキンマンションのボスは知っている』小
川さやか著 春秋社 2019.7

『あなたの大切なひとを守るために』中野淑子著
旬報社 2021.1

『日本習合論』内田樹著 ミシマ社 2020.9

『「人種」「民族」をどう教えるか』中山京子著
明石書店 2020.12

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『推し、燃ゆ』宇佐見りん著 河出書房新社 2020.9

『心淋（うらさび）し川』西條奈加著 集英社
2020.9

『三日間の石』杉本真維子著 響文社 2020.6

『とわの庭』小川糸著 新潮社 2020.10

『心は孤独な狩人』カーソン マッカラズ著
新潮社 2020.8

『クスノキの番人』東野圭吾著 実業之日本社
2020.3

『半沢直樹 アルルカンと道化師』池井戸潤著
講談社 2020.9

『風間教場』長岡弘樹著 小学館 2020.12

『日没』桐野夏生著 岩波書店 2020.9

『お探し物は図書室まで』青山美智子著 ポプラ
社 2020.11

寄 贈

『大村はま国語教室』シリーズ全15巻 大村はま
著 筑摩書房 1984

『《世界》がここを忘れても：アフガン女性・
ファルザーナの物語』清末愛砂 文 寿郎社

『日本社会の変動と教育政策』小川正人著 左右
社 2019.8

『戦中・戦後の経験と戦後思想』北河賢三・黒川
みどり編著 現代史料出版 2020.9

『中国文化大革命博物館』上巻・下巻 楊克林編
著 柏書房

(ご寄贈は多数ありますが、一部ご紹介です。あ
りがとうございました。)

訃 報

昨年7月、教育図書館の運営に永年貢献された
横川敏晃氏が肺炎のため永眠されました。日本教
育会館、教育図書館のために30年以上勤務され、
歴史を語ることのできる貴重な方でした。教え導
いていただいたことに心から感謝し、ご冥福をお
祈りいたします。(川内)

教育図書館案内

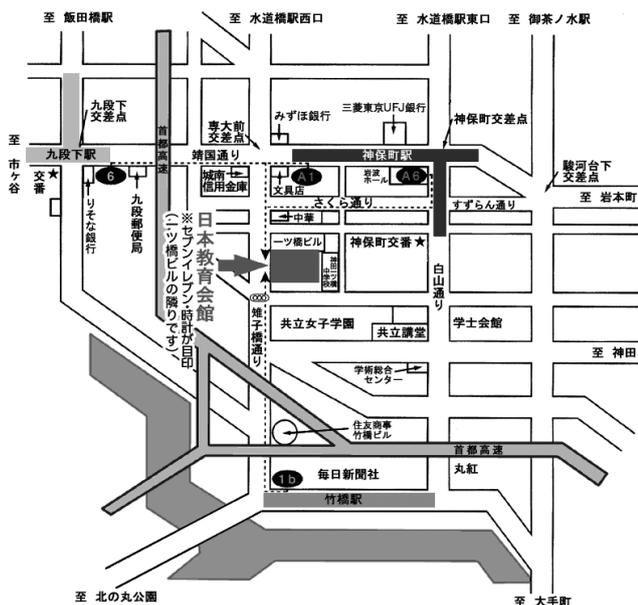
- * 開館時間：午前10時～午後4時30分
- * 開館日：火・水・木
(閲覧の方はご予約をお願いします。)
- * 貸出(利用者登録が必要です。)
貸出冊数：5冊/貸出期間：3週間
- * 閉館時返却方法：図書館入口前の「ブック・ポスト」をご利用下さい。
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピー：白黒1枚10円/カラー30円
- * 蔵書検索
ホームページから蔵書検索できます。
(教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵)

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・教育評論・月刊JTUなど
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、ブックレット、季刊誌、各研究委員会報告書など
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー：
人権関係、東日本大震災など災害の記録等

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分(JR総武線)



アクセス抜群

神保町駅から**3分**
802名収容の大ホール



10~300名
まで使える
会議室(18室)

1階画廊
もご利用できます

一般財団法人日本教育会館

TEL 03-3230-2831
https://www.jec.or.jp/
受付時間 9:00~17:00